

北京地下鉄駅名考尋① —第1期工事区間（前編）—

松 木 民 雄*

An Investigation on the Station Names of the Beijing Subway Line Vol.1 ——A Section of the 1st Construction (the First Half)——

Tamio MATSUKI

内容提要

本研究对北京地铁开通顺序、站名及有关问题进行了考察，本文以第一期工程区间为对象。

1965年3月初，北京地铁计划为13个车站，3月末加上木樨地站起名为401线。同年5月追加了八角村站和象来街站（长椿街站）与401线相连接的后山线3车站（苹果园站、福寿岭站、高井站）做为402线增设下来并以这19个车站为第一期工程了。

一期工程在1965年7月1日开工，1969年10月1日开始运营。

本论文首先就1971年试运营的16个车站（古城路至北京站）的选定条件及车站地名的由来进行了考察。其中有3个车站是日本侵略时代命名的。还有对2年后的1973年增设的402线非公开的苹果园站的理由和意义进行了论述。尔后追加考察了非公开路线的402线3个车站中的2个车站（福寿岭站和高井站）与其连接的黑石头站及三家店站的地点、地名的由来。

就此一期路线的运营从1969年10月1日试运营开始至1984年9月19日2期路线的弧形部分开通的15年间该线段是北京地铁独一无二的。

最初的16个车站其中更名的车站有5个占31%。并查明还有些是变化的。进一步明确指出了一期路线所有的站名为地名的这一特点。与其他城市的地铁站名为人名、一般名、口号名、方位名等相对照、可以说北京地铁站名是以地理位置为主的。其以站名来判断地理位置的这一方便性是北京地铁站名的一个特征。

目次

1. 前言

2. 一期工事の401線のうち、現在の1号線西部分について

古城路・八角村・八宝山・玉泉路・五棵松・万寿路・公主墳・軍事博物館・木樨地・南礼士路の各駅
(以上前編)

3. 一期工事の401線のうち、現在の2号線南部分について

長椿街・宣武門・和平門・前門・崇文門・北京駅の各駅

4. 一期工事の402線他

苹果園・福寿嶺・高井および黒石頭・三家店の各駅

5. 結言

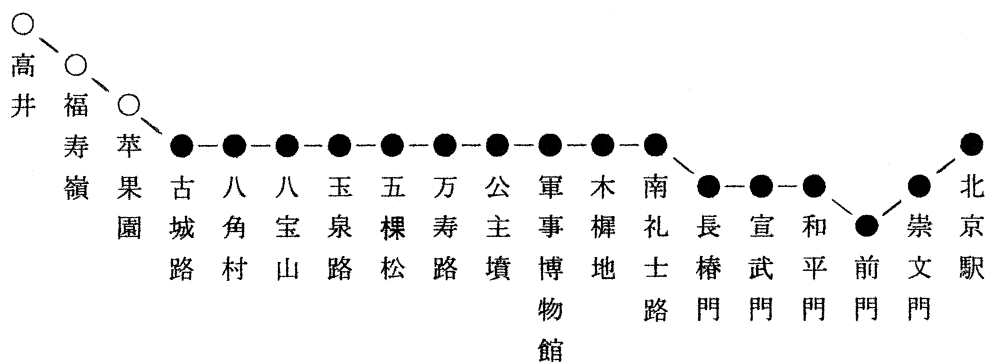
1. 前言

今日、世界最長を記録した北京地下鉄は、その最初の構想は民国時代からあり（1947年）、新中国になってからも幾多の紆余曲折、即ち、ソ連に学ぶ中ソ蜜月時期、次いで中ソ対立、1966年からの文化大革命、世界的核戦争の軍備、そして改革開放路線によって、また日本からの支援もあるのだが、そうした中で驚異的努力により、一大発展に至ったものである。

その地下鉄路線の変遷については前出論文にて述べたが、本論文で考察の対象となる一期工事路線の形成について、確認と付言を加えたい。

一期工事の路線の形状は、北斗七星を伸ばしたようなルートである（図1）が、これには理由がある。本来的には一直線であり、1950年代のプラン（図2）に見えるように古城から紅廟までの29kmに及ぶほぼ一直線の路線として示されている（太い線の部分）。この西端の古城には首都鉄鋼工場があり、東端紅廟には火力発電所があって、東西の工業区を結ぶルートとなっている点が注目される。そして西北に伸びる路線は西山の軍営地に連結するためのものである。前論文でも言及したように、北京地下鉄の当初の目的は軍備であったことから、必須条件とされた。現在では首都鉄鋼工場は唐山市に移転の予定であり、紅廟の火力発電所も縮小されて、状況は当時とは、大きく変わっている。1960年に開業した首鋼の前身は1919年創業の石景山鋼鉄廠である。

こうして基本ルートが考案されたが、ここでいくつかの問題が発生した。東西直線部分の西



●は 401 線

○は 402 線（進山線）

図1 1期工事路線の駅名（1965年7月1日起工式時点） 北斗七星の形状（15年間）

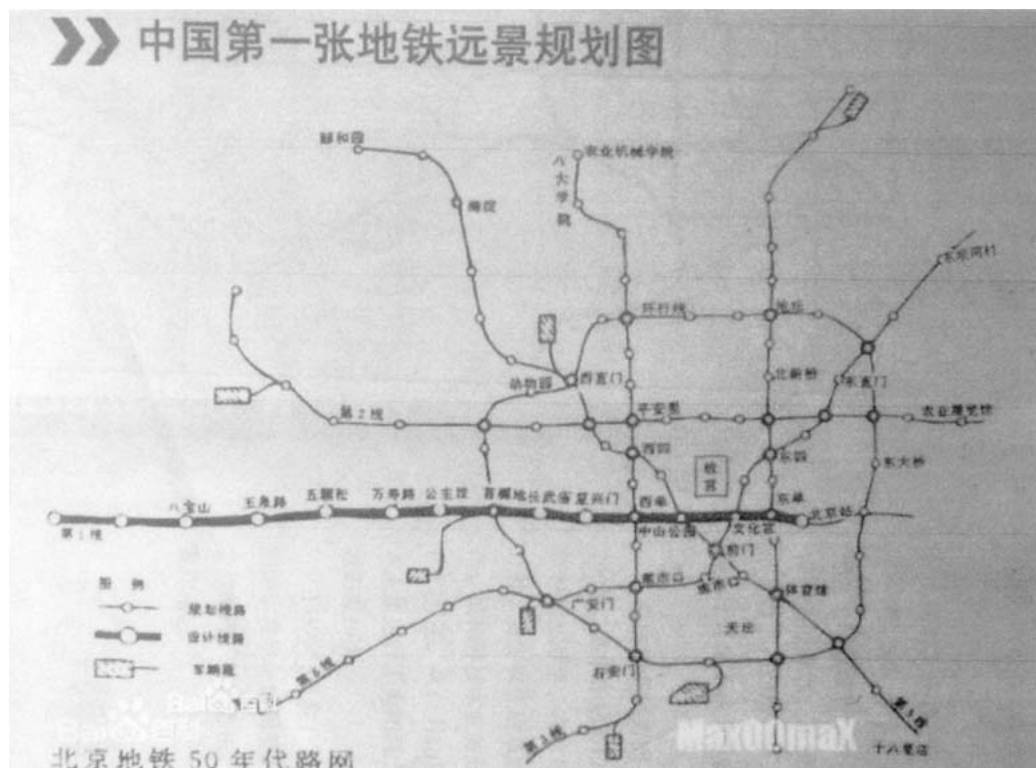


図2 1950年代の北京地下鉄プラン

半分は旧日本軍が設けた新市街に通じる道路を用いるもので、民家も少なく、開削工事（露天掘り）は比較的容易であった。但し深掘りを要望する中で数年にわたる激論が展開され、浅掘りに決着している。その開削工事で問題となるのは北京城内の区域である。当時すでに復興門があり、東進は可能であったが、その路線は天安門前を露天掘りで進むことになる。天安門広場は各種の集会の場となっており、国慶節・メーデー・軍事パレード・市民パレード等の国家的行事が催されるため、その長安街を長期にわたって露天掘りすれば支障を来すことになる。また國務院の前が通行止めになるのも極めて不便と思われる。

そのため東西長安街のルートは回避されることになった。そして議論の末、城壁を撤去して、その跡地を掘り、地下鉄を埋設することとなった。この決定に際しては、梁思成が城壁保護を主張し、周恩来が城壁脇を利用する提案をしたが、民家保護の立場による毛沢東の提示に決まったのである。

そのため復興門を通らず、南礼士路から長椿街に曲がり、城壁に沿った形で北京駅にまで至ることとなった。こうして北斗七星の形が決定されたのである。因みに天安門前のルートが可能になったのは、露天掘りではなくトンネル工法によって地下鉄工事の建設が進められる条件が整ってからのことであり、1990年代の復八線の工事まで待つことになる。

こうして北斗七星形のルートとなった一期工事の路線上に各駅が設けられるのであるが、1965

年3月当初の13駅（古城路・八宝山・玉泉路・五棵松・万寿路・公主墳・軍事博物館・南礼士路・宣武門・和平門・前門・崇文門・北京駅）に3駅（木樨地・八角村・長椿街）が追加されて401線となり、更にその西延長として進山線3駅（苹果園・福寿嶺・高井）が増設されて402線となり、都合19駅とされた。そしてこの一期工程に特徴的なことは西方の402線が軍事用として非公開とされたことである。その中で苹果園駅が完成2年後に公用として追加されたことについては後述する。かかる19駅について、その駅名に関する諸問題をめぐって考察することを本論文の目的とする。

2. 一期工程の401線のうち、現在の1号線西部分について

一期工程は西部分から施工が開始されたため、また開通時（1969年10月1日、周恩来ほか数名の元帥が試乗した）には古城駅から発車したこともあり、古城駅から東に進む順序で考察を始めることとする。また1971年の仮営業では1月15日の北京駅から公主墳まで、8月5日には玉泉路まで伸び、11月7日に古城駅に至る路線となる。苹果園駅まで延伸するのは2年後の1973年4月23日であり、当初是北京駅から古城駅まで2年3か月にわたり、路線として定着していた。これらのことから古城駅から北京駅まで当時の名称に基づき、今日の駅名に定着する

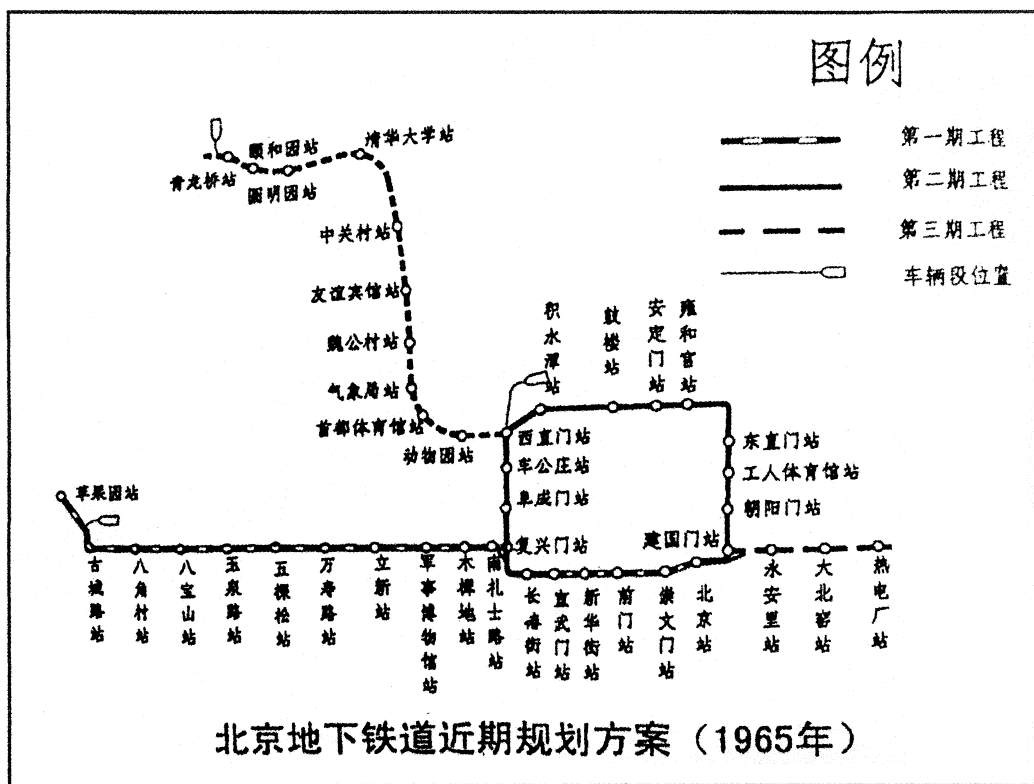


図3 1965年路線図（『北京地鉄発展史』）

までの呼称について調べることにする。苹果園駅については計画では進山線に含まれていたことから402線の中で福寿嶺・高井（・黒石頭）と共に扱うこととする。

まず1965年2・4指示（毛沢東による）によって開始された北京地下鉄の当初の駅名として参考になるのが同年の1965年に作成された路線図（図3）である。

1965年3月14日に提示された1期工事の路線は石景山（古城）駅から北京駅までの13駅であった。その駅名は前述の古城路・八宝山・玉泉路・五棵松・万寿路・公主墳・軍事博物館・南礼士路・宣武門・和平門・前門・崇文門・北京駅で、同月30日に木樨地站が追加されて（その理由は後述する）14駅となり、同年5月5日には、八角村・長椿街駅が増設されて、401線は16駅で構成されることとなった。

その3駅が追加された理由は、駅間距離の均準化が目的であったと思われる。各駅間の距離について公表資料に従って見てみよう。駅名は適宜略称として示す。単位はm。

古城・八宝・玉泉・五棵・万寿・公主・軍博・南礼士路・宣武・和平・前門・崇文・北京	
3244 1479 1810 1778 1213 1172 2457	2229 851 1171 1634 1023
1291 ↑ 1953	1166 ↑ 1291 1300 ↑ 929
八角	木樨 長椿
	南礼士路・長椿街は推定で1300m

これらの3駅を追加すると2000mを超える区間がなくなり平均化されることになる。

このうち、南礼士路と長椿街の距離は公表記録がないため、両者の復興門からの距離は分明しているので計算によって1300mと推定した。

一方、駅間距離について表上には示していないが、苹果園駅・古城間は2606mあり、北京駅から古城までを公用区間とすることから、当時は非公開区間として、長さを除外していたのであろう。あるいは首都鉄鋼工場内ゆえ駅を設置できなかったのかもしれない。新駅を要望する声もあり、将来、中間の駅が出来る可能性もある。北京地下鉄には駅間距離の更に長いものもあり、通常地下鉄での最長は13号線の6.8km（北苑から望京西）であるが、空港線（机场线）では20km（第2ターミナルから三元橋）となっており、均等化はすべてに当てはまるものではなく、その土地の状況によるものと思われる。

401線の決定に続き、更に同年6月19日には進山線として3駅（苹果園駅・福寿嶺駅・高井駅）が設けられ、402線と呼ばれた。その402線のうち1965年の計画路線図には苹果園駅が示され、また環状路線（2期）と西北路線（3期）も加えられ、「近期」とあることから、他のルートも想定されていたと見られる。それでは古城駅から駅名の考察を始める。

①古城路駅【古城路站】（【 】は中国語表記）

古城とは古い城（中国では城は町をさす）があったように見られるが、その由来についてはいくつかの説がある。

- (1) 伝承では村の東（今の古城大街の東）に老爺廟があり、門前に2本の大きな白皮松の木があって、その形が立派で、遠くから見るとあたかも古城の門のように見えたことから古城村の名がついた。
- (2) 『宛署雜記』に古城村の名があり、村譜の記載によれば、村民の多くは山西省洪洞県の大槐樹村から来たとあり、明の永楽年間に各地から北京に8回にわたり移民が行われたことと関係があらう。
- (3) 『宋史』によれば五代の趙德鈞が幽州を鎮守したとき、桑乾川（永定河）を堀となし、盧師神祠（八大処盧師山）と安祖寨（今の衙門口）との間に城を築き守備とした。その城に因む。その城は幽州城の右腕に相当するという。
- (4) 『光緒順天府志』によれば、北京城の西35里（17km）に古城邨（城子邨とも）があり、『方輿紀要』の玉河廃県のこと、もと薊県の地であり、五代の劉仁恭が置いたとされる。
- (5) 李自成が北京に攻め込んで来たとき、ここを城壁と見間違えたことから、古城と命名した。その記念として村の西北角に三義廟を建てた。古城村では1940年代には花会が催されていた。

現在では老古城と新古城とがあり、前者が古城の由来となった場所と見られる。この古城路駅は石景山駅と記されることもあり、計画の段階では併用されていたようである。現在の石景山の区政府（区役所）は八角村駅と八宝山駅の間で、銀河南街の東にあるが、1965年当時、石景山区政府（区役所）は古城路駅の東2～300mの古城東街南口にあり、古城は石景山の中心であって、そのため石景山駅とも称されたと考えられる。

そのため石景山の地名の由来についてここで少しふれておきたい。石景山の由来は永定河沿いの東側にある同名の山に因む。山の高さは184mで、もとは寺院が多く建立され、「第一仙山」と言われており、そのうちの金閣寺には石板に刻した仏教経典（石経）が所蔵されていたことから石経山と称され、その類音の石景山に改められたとされる。付近には石景山古建築群・碧霞元君廟・元君殿がある。現在地下鉄路線のS1線が永定河と交わる東南に石景山が位置している。

ところで古城路駅の名称は現在では古城駅【古城站】となっている。変更時期は不明とされるが1990年の北京地図には古城路駅とあり、1991年の『北京市・地名詞典』では古城駅とされていることから、この頃に変更されたものと思われる。その理由について考えると、1期路線には玉泉路・万寿路・南礼士路があり、それらに類する形で路と名付けられたのではないだろうか。玉泉路・万寿路・南礼士路は実際の道路と駅の場所が一致するのであるが、古城路の位置を調べてみると古城駅の北数百メートルに東西に通る古城路があり、駅の場所とは離れている。そのため地区全体の名称である古城に改めたと推察する。古城の駅ではプラットホームの壁を城壁のイメージで表現し、他の駅とは異なった特徴的なものとなっている。

②八角村駅【八角村站】

古城駅の東隣に予定されていた八宝山駅との間3244mに、この八角村站を追加（1965年5月5

日)することで、西隣1291m、東隣1453mとなって、駅間の均準化が図られたことは上記の通り。八角村は明代には『宛署雜記』（明・沈榜1593年刊）に八角莊と表記され、山西省洪洞県から八つの姓の人々が難を逃れて移住してきたことから名付けられた。当初は八家村であったが、のち出身地の方言で家が類音の角に変化したもの。その八家は趙・銭・閻・孔・祁・梅・王・肖で、龍すなわち李自成の反乱軍に従って北京に入ったともいう。同地出土の清代康熙37年（1698年）の墓誌銘文には八家村とある。

その後、この地には五環路の西の区域に広大な遊園地（遊樂園）が建設された。1986年のことで、広さは34haあり、香港HKDLの35ha、東京TDLの51haに匹敵する。世界各地の有名建築、キャラクターが登場することで名高い。この遊園地は「石景山遊樂園」が正称だが、「八角遊樂園」とも通称され、それに因んで駅名が八角村から八角遊樂園駅【八角游乐园站】に変更された。1990年代のことである。駅のプラットホーム通路には八に因んだ八角形のデザインが敷き詰められている。

③八宝山【八宝山站】

この八宝山駅是北京地下鉄の建設の中で最も早く完成した駅である。八宝山の地は革命墓地（革命公墓）として名高い。

八宝山はもと黒山と言われていた。その黒山について伝説がある。即ち、『宛署雜記』『遼史：韓延徽伝』によれば、漢代、この山に韓延寿が住み、韓延徽やその子孫もこの南麓に埋葬されたため、この地は韓家山や類音の罕山といわれ、のち文字が変化して黒山になったとされる。明代には黒山護国寺をはじめ多くの仏寺があった。清朝乾隆期の『日下旧聞考』の記載によると明代の延寿寺・靈福寺や朝陽庵（清代）など諸寺が点在していた。もと西方の山頂には娘娘廟（清代）があったが1950年代に撤去されている。黒山と呼ばれた後、この地で八種の優れた建材、すなわち八宝が産出されて八宝山といわれるようになった。その八種については諸説があるが、『石景山区地名志』をもとに次に示す。別名は他の資料による。即ち耐火土（坩土とも）・白土（陶磁用）・馬牙石（火石とも。石英）・紅土（装飾用）・青灰（塗装用）・板石（灰石とも。建材用）・黄漿（黄土とも。塗料）・沙石（砂石とも。建材）がそれである。貴重な石材が産出する理由は八宝山に断層があるためで、数億年前の地層から見いだされるものである。

またこの山の洞窟には八種の宝物（金牛・金馬・金鶏・金碾（石臼）・金磨（挽き臼）・金豆子（金の粒）・金簸箕（箕：み）・金筐籠（筐））が隠されていることに因むとの説もある。

新中国になって、八宝山革命公墓となり（1949年11月建設。林徽因が設計）、中国革命に尽力した著名人が埋葬されている。例挙すれば、朱徳・万里・徐悲鴻（画家）・朱啓鈞・梁思成・スメドレー（米国ジャーナリスト）等で数名の人物是北京地下鉄の拙論にも登場する。なお西北側には一般の人民公墓がある。

④玉泉路駅【玉泉路站】

八宝山駅の西隣駅は玉泉路駅となる。玉泉路とは1939年計画の旧日本軍による北京市西郊外

の駅名は、この玉泉路と金台夕照（10号線）が挙げられる。

因みに1965年7月1日の北京地下鉄起工式はこの玉泉路で開催されている。付近に中国科学院や政府関係の部署があったからと思われる。

⑤五棵松駅【五棵松站】（棵は樹木を数える助数詞）

玉泉路の次の五棵松駅も西郊新市街と関連する道路である。即ち前掲の西新市街道路名（図4）のうち、中央に当たるのが五棵松路の前身で、日本侵略時（1939年）には幅6mの「興亜大路」と名付けられ、民国時代には「中央大路」とされ、また新中国になって1952年「五棵松路」と改められた。それはこの地が予てより五棵松と呼ばれていたからである。

「五棵松路」は現在では「西四環路」（2001年6月に完成）に含まれ、道路名ではなくなったが、地下鉄の駅名として残っている。五棵松は五本松の意味であり、今日の五棵松地下鉄駅の十字路で西北角にあったとされる。五棵松の由来について二説がある。

- (1) 現地の老人の話によると、清代には葛老墳と言われ、ある五兄弟（姓は不明）が埋葬された。家族は彼らの冥福を祈って、各々に松を植えた。清代にはよくある習慣であった。世が移っていく中で、その五本の松は青々と繁り続ける。当時は西郊外の荒地で民家も少なく、五本松は通行人の標識となっていた。西郊外（今の門頭溝区）に住む人々は石炭を運んだり、駱駝引きをしたりしていたが、盗賊から身を守るため数名でまとまって、この五棵松を集合場所とし、そして北京城内に向かったのである。その逆に北京城内の商人たちも買い出しに行くときは、ここを集合地とした。北京城から5kmの地にあたる。因みに日本侵略期、日本軍はトーチカを五棵松の周辺に設け、道を付け、新亜路と名付けた。

新中国になって1950年代の初めに道路が修理されて、五棵松の四方はコンクリートの舗装道路となった。1967年に地下鉄工事があり、駅名となる。そのとき2本の古松が移動されたが、地下鉄完成後に戻され、五棵松はもとの姿となった。（『五棵松下話今昔』沈順根・張鳴、1981年『北京風物散記』第1集、叢宏業（等）科学普及出版社、所収）

- (2) ここにはもと清代の提督で紹英（1861～1925年）の墓があった。墓地には五本の松の木があり、当地の目印として五棵松と呼ばれていた。1966年に地下鉄工事があり、もとの松は枯れてしまい、のち地下鉄駅の西北出口に五本の松が植えられ（図5）、名を残している。（北京地鉄1号路線：熱門資訊より）



図5 《五本松》の写真（熱門通訊より）

二つの言い伝えは全く別物となっている。真偽は直ちに定かにできない。五棵松路は2001年6月に四環路に吸収されて消滅したが、五棵松の名は地下鉄の駅名として残っている。

⑥万寿路駅【万寿路站】

五棵松駅の東隣は万寿路駅である。これも図4の西郊新市街の道路名から判るように、日本侵略時代に付けられた道路名である。

「万寿」から関連付けられる対象は万寿寺（万暦5年1577年建立）・万寿山（頤和園：乾隆帝が命名）が考えられるが、両者ともこの道路の延長線上にあるわけではない。実際にはこの道路の更に2kmほど北側にある明代の巨大な仏塔の名称：永安万寿塔（図6）に因むものである。

この地是北京阜成門の北8里（4km）に位置するため八里塔とも通称された。その寺の名は慈寿寺で明の李太后の夫・穆宗（1537～1572年）が早世したため、子の万暦帝（1563年～1620年）の長寿を祈って母李太后が1578年に建立した勅建寺である。この寺については拙論にて記述したが、塔の正式名称は「永安万寿塔」で高さは56mに及び、建立年は1578年の明代であるが、遼代の形式を用いた遼式塔で、精緻を極めた彫刻群は貴重な文化財となっている。万寿寺塔、玲瓏塔とも俗称される

因みに万寿とは、万歳と同様、皇帝のみに用いられる長寿を願う語で、古くは『詩経』にも万寿無疆の句で散見されるが、当時は諸侯にも用いられたとする解釈もある。前掲の万寿寺・万寿山は皇帝に関わる名称である。現在、万寿路は塔南の広域住宅区名でもある。



図6 《永安万寿塔の写真》

⑦公主墳駅【公主坟站】

次に東に位置するのは公主墳駅であるが、この名称に関して大きく2点の問題がある。その一つは公主墳が誰の墓かということ、その二は公主墳駅が一時期、立新站と呼ばれており、その理由と期間についてであり、詳細に検討したい。

まず公主墳の墓主について。公主とは皇帝の娘のことで、明・清代には皇帝陵に合葬されず、各自の墓を設け、北京各所に点在していた（図7）。調査によれば100か所を数えるという。この公主墳もその一か所である。その墓主に関して、次の5つの説がある。

（1）孔四貞（1616年頃～1713年）を墓主とする説。

明から清に転じた、勲功の将軍：孔有徳の娘が孔四貞である。父は定南王となったが



図7 《当時の公主墓の例》及び墓域遺物写真

（快資訊より）

戦没。孔四貞は順治帝の母の養女となり、和碩公主となる。武術に優れ、定南王を継ぐ。のち夫の孫延齡が投じた呉三桂を討ち、雲南を平定し、北京に戻ったのち、死去。97歳であった。康熙帝はその功績を称えて西郊外に公主墳を設けた。東側が孔四貞の墓で北京地下鉄の工事で発見され、西側はその娘と見られる。（沈順根・張鳴「歴史滄桑の公主墳」及び拙著『北京地名考』162頁。『清史稿』166）

(2) 乾隆帝の養女説

乾隆帝は江南を巡った際に見初めた美女を養女にすると約した。のち北京に来て養女となり宮中に入ったが妬まれて死去。これを傷んだ乾隆帝は公主として埋葬したのがこの墓であるという。西郊外の翠微路あたりとされる。（「百度百科」より）

(3) 乾隆期の武将：金泰の悲恋（現在、現地に石像（図8）および説明文がある）

武将の金泰は軍功により元帥となっていた。とある庭園で和碩公主に出会って、相思相愛となるが、老臣が邪魔をして金泰を流刑とした。重病篤しくなった金泰は永別の手紙を出し、それを見た公主は自殺して亡くなる。皇帝は二人を葬り、公主墳がそれであるという。この和碩公主の石像が近年、現地に設置され、上記の話が刻字されている。但し、刻字文の中で、和碩公主が還珠格格の原型とされるのは不正確である。というのは、公主は皇帝の娘にあたり、格格は宗主の娘であるため、各々別の称謂であるからである。2018年に孔四貞を主人公にしたテレビドラマ「還珠格格」が人気を博したという。



図8 《現地の石像》

(4) 金泰將軍の異話

満族の皇女が金泰元帥と結婚した。妻は無益な殺戮を止めるよう皇帝に告げようとしていた。その折、金泰が漢人と判り、妻の命乞いで地方に追放となった。半年後、金泰からの遺書が届き、妻は悲しみのあまり服毒自殺した。皇帝は金泰の望み通り、香山に葬り、妻を今の公主墳に埋葬したという。（陳文良『北京伝統文化便覧』）

(5) 清代嘉慶帝の三女・四女説

四女の五代目子孫にあたる林勤氏（生没年は1915年～1994年。チンギス・ハーンの33代子孫。早大に1941年～44年に留学している）は長年にわたり、墓の保護に努めてきた。その解説によれば以下の如し。西墓は西北に位置し、屋根は緑、被葬者は嘉慶帝の三女で名は莊敬和碩公主（1781年～1811年3月31歳で死去）、東墓は東北に位置し、やや大きく、屋根は黄色、被葬者は嘉慶帝の四女で名は莊靜固倫公主（1784年～1811年5月28歳で死去）。逝去の時期が近かったため同墓とされた。但し両墓の墓式の相違は、母の身分が異なるためで、固倫が満州語で天下を意味し、皇后の娘を示す、したがって皇帝用の黄色を用いるのに対し、和碩は満州語の一方の意味で第一級の妃を指すため緑色を使い、やや小さく造営されている。同じ皇帝の娘でも身分が違う。また公主は生まれる前から

嫁ぎ先が決まっていたとされ、この三女の夫は索特納木多布濟で、四女の夫は瑪尼巴達喇である。そして1937年のこと、殷汝耕の保安部隊が盗掘をし、遺体と僅かなガラス箱のみが残された（一説に1939年）。ついで1938年には日本軍によって計画された、長安街の西延長道路がこの墓を通過するため、林勤氏は縁者と相談して保護にあたり、日本当局の所長に金銭（八千銀元）を渡して南北に迂回することとなった。こうして辛うじて守られた墓であったが、1965年の北京地下鉄工事では、土地所有の証明書を政府に上納し、直線工事のため墓を移動させることになった。識者によれば、あと10数m外れていれば墓が守れたのだが、当時は文化財保護の意識が不足していたと悔やむ。興味深いことにソ連による1957年のプラン（図9）では墓は北側に迂回されている。その意味について考えると、文化財保護の意識があったのではと思われる。

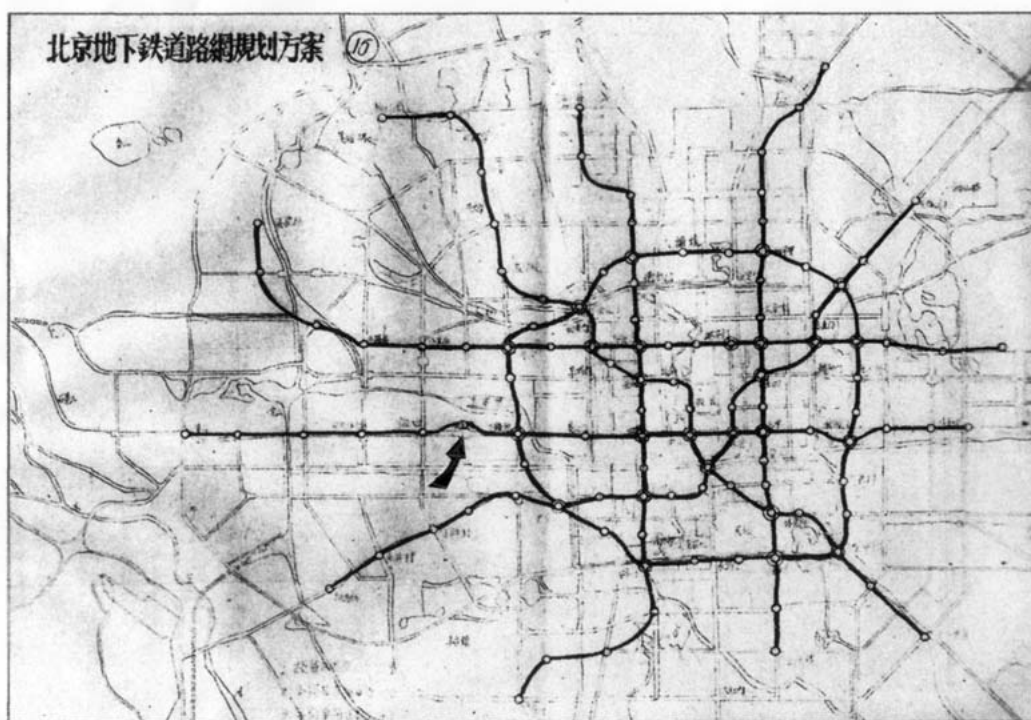


図9 1957年北京地下鉄プラン（矢印が公主墳の迂回箇所）（『北京地鉄発展史』より）

1965年の地下鉄工事の際、鉄道兵が墓を発掘したとき、死後150年を経た遺体の皮膚は白く生きているようであったが、日光に当たってすぐ風化したという。研究者の馮其利氏は遺体出土の状況ではなく、信じがたいと見ている。林勤氏によると、公主墳のものと地名は王佐村で、清末に苑家村（『宛署雜記』には宛家村とある）と改名、1938年～40年の日本による支配時に長安大街を新市街に伸ばす際、公主墳と改名されたという。（王同禎「公主墳瑣考」）

これら5説については1965年の地下鉄工事の発掘で決着がつき、(5)の清代嘉慶帝の三女・四女説が認められている。但し他の説も興趣をそそる物語であることから、それぞれ人気がある。かつての公主墳は面積19畝（約1.3ha）、現在では西南に公園として残り、享殿3棟が再建され、1992年に海淀区の保護文物となった。当時の公主墳は残存していない。

次に立新の駅名について述べる。「立新」の2文字は文化大革命の時期に政治的スローガンとして多く使われた主要な用語で、全体の文言は、「破四旧、立四新」といい、思想・文化・風俗・習慣の四つを改めようとするもの。文革の中心的思潮とされる。この政治運動ため、古い文化財も多々破壊された。略して「破旧立新」、そのうしろ二文字が「立新」である。

このスローガン「立新」を用いて、公主墳の地名は文革時期に立新街に改められたという。公主が封建的であり旧思想の対象とされたからであろう。但し公主墳が旧日本軍による命名と知ってのことではないと思われる。なぜなら旧日本軍命名の玉泉路・万寿路は改名されていないからである。因みに復興門・建国門も民国政府の命名であるのを知るに及ばなかったようで、これらも改名されていない。1940年1947年の北京地図および1957年の地下鉄計画図や1965年5月5日の1期工事駅名（『北京地鉄発展史』による）には全て公主墳とされており、少し降るが1982年の地下鉄地図に立新站とあることから、文革時期に上記の立新街によって駅名を改めたものと考えられる。その文革期の立新の名残りが1990年の北京地図に見られる。即ち今の公主墳駅の南側に立新餐厅と立新旅館の名称が記され、公主墳の通りが立新街と名付けられていたことを示すものであろう。最近の2014年の地図によると前者は国際商報に、後者は万発大厦に相当すると見られ、2017年の地図によれば前者は移動通信営業庁に当たるであろう。当初、立新駅の名は単なる文革のスローガンによって駅名のみ改称されたものと考えたが、立新は公主墳の地名に用いられ、駅名はその改名の一環であった。但し翻って考えればやはり政治的スローガンに影響されたものにほかならず、その関連で想起されるのがピョンヤンの地下鉄駅名で、戦友・赤い星・連勝があり、モスクワ地下鉄にもプロレタリアートの駅名があるが、こちらは地区の名という。これらは具体的な地名ではないので、場所の判断には困惑するであろう。その点、北京地下鉄は地名がほとんどで、一つの特色となっている。東京地下鉄も同様。札幌地下鉄ではかつて霊園前駅が具象に欠け、自衛隊前駅も特定は困難ではある。

この「立新」は文革当時に北京市内の他の地名にも改称として使われ、西城区の西黄城根南街が立新路に改められ、同北街は立新北路となる。また西城区の昌堂門胡同も立新路になる。これらは文革後、もとの名に戻っている。また北京市海淀区にある中国人民大学の南側に立新の地名があり（万泉河路の東側）、これは1974年に立新小学校（文革期の命名と思われる）に因んで地名になったもの。

立新の地名として当時の新聞に写真入りで大々的に宣伝されたのがチベット自治区の立新大街である。これは旧名の帕廓街（大昭寺の巡礼路で右回り、全長1km。八角街とも。帕廓はチベット語では【པ་ཀོ་ལོ།】pa-ko-で巡礼の意味）を破四旧に属するものとして立新大街に改めたもの。今は原名の帕廓街に戻っている。

今日でも使われているのは西安市の立新街と安徽省銅陵市の立新站（寧銅鐵路）がある。

立新駅が文革時に改名されたことに対して、論理的に矛盾する資料があり、ここで検討する必要がある。それは前掲した1965年の地下鉄計画図で、そこには、立新駅として表記されている。他方、文革時に「破旧立新」の政治的キャンペーンの開始は1966年6月1日であることから、時系列的には文革時前に立新駅へ改名されたことになる。公主墳の地名が文革時に立新街に改称されたこととも矛盾する。また1965年5月5日の1期工事駅名の決定で公主墳駅となっていることとも一致しない。この矛盾はどのように理解したらよいのだろうか。ここで考えられるのは1965年の計画図が公表されたのは1965年内とは限らず、1966年夏の文革以降になった可能性もあり、公主墳が立新街に改められた時期以降に1965年作成の計画図が地名を文革式に改め、1965年作成として公表されたのではないだろうか。同計画図については和平門駅が新華街駅となっており、ここにも矛盾点が存し、文革の影響が窺えるのであるが、これについては和平門の項目にて述べる。

公主墳の墳の文字に関連して顧みると、北京地下鉄のプロジェクトとして「復八線」があったが、その八は八王墳という地名であった（その墓主名等については後論の予定）。この墳の字が雅でないとして、地下鉄は八王墳駅ではなく大望路駅に改められている。地上の地名としては八王墳は見られるのであり、バス停としても存在している。その地点を南北に通る道路が西大望路であることから、西を外して大望路駅になり、現在に至っている。但し復八線の八は八通線の路線名として残っている。それに対してこの公主墳の名は一時期文革の影響で立新駅となったが、そして1982年の地図ではなお立新駅だが1990年の地図では公主墳駅に戻っていることから、80年代に立新駅から公主墳駅に復元されたと見られ、そして公主墳駅の名で今日に至っており、墳の字を改めることにはなっていない。同じ現在の1号線でも公主墳駅と八王墳とは扱いが異なっているわけである。旧日本軍命名の地名が残っているのも歴史のアイロニーといえよう。

⑧軍事博物館駅【军事博物馆站】

この公主墳駅の東隣には軍事博物館駅がある。軍事博物館（図10）の正称は中国人民革命軍事博物館である。この一帯も旧日本軍の新市街と関わりがあり、新市街の東端にあたる幅百mの道路（軍博西路。横切るだけでも歩き甲斐がある。日本侵略時代には円明園路と名付けられていた）の東側に建設されたもので、1958年10月着工、翌1959年7月完成という突貫工事であった。公開は翌年。建国10周年のモニュメントの一つであり、十大建築物に数えられている。



図10 《軍事博物館》（毎日頭条より）

その十大建築とは1958年9月5日に決定され、1959年9月までに完成した大型建築物で、ソ連式のスタイルである。「百度百科」によれば1. 人民大会堂 2. 中国歴史・革命博物館（今は国家博物館） 3. 軍事博物館 4. 民族文化宮 5. 民族飯店（東単にあり） 6. 釣魚台 7.

華僑大厦（既に改築） 8. 北京駅 9. 全国農業展覽館 10. 工人体育場となっている。

軍事博物館は敷地面積 8 ha、展示面積 4 ha もある広大な施設で、古代から近代までの軍事関係の資料を展示している。内外の貴賓による 1 期工事路線の参観コースは、この軍事博物館駅がスタートとされていた。それはこの巨大でかつ中国の軍事力を目の当たりに示す宏大な軍事博物館の見学に続くものであったと思われる。

軍事博物館の入館料は2008年3月1日から無料となっている。

⑨木樨地駅【木樨地站】

次の東方向の駅は木樨地站であるが、この駅は前述の如く、当初1965年3月初旬の計画中には無かったもので、軍事博物館駅と南礼士路駅の駅間距離は2457mの長きに及んでいた。ほどなく1965年3月30日には中間駅としてこの木樨地站が追加され、西の軍事博物館駅までは1166m、東の南礼士路駅までは1291mとなり、ほぼ均等化された。この木樨地は単なる中間点というだけでなく、地下鉄用の変電所があったことも一因と見られる。

筆者は先に『北京地名考』（1988年刊）において木樨地の地名について木犀すなわちモクセイ（中国では桂花とも）に因むと記したが、今回再査してみると、実は名称の由来はかなり複雑であった。以下に述べる。

まず木樨の文字についてであるが、樨の字を当てるのは樹皮がサイ（犀：牛の形で尾に剛毛の形状による）の皮膚に似るためという。古代中国にはサイが黄河流域に生息していた記録がある。木樨は木犀とも表記されるが、北京の地名では木樨を用いている。因みに中国料理の「木樨肉」（木犀肉、木須肉とも）は卵黄によって黄色を呈し、キンモクセイの花の色に寄せた名称である。

木樨は確かにモクセイであるが、一般にはキンモクセイを指し、黄色の小さな花が強い香りを発する樹木で、中国南部原産とあり、北京では見られず、日本でも北海道は除かれ、静岡県（筆者の生地）では県の樹木に指定されている。その南方に属する木樨すなわちキンモクセイに類した黄色の植物がこの地域一帯に植栽されていたことから木樨地と呼ばれたのである。というのは木樨地の一帯は道教寺院・白雲観の菜園であって、かなりの広さを持っていた。現在の木樨北里・木樨南里の一帯で、数百メートル四方の広さがあり（白雲観から木樨地駅までは約1 km）、白雲観の権勢を如実に示すものに他ならない。『日下旧聞考』に蔬園と見える。そこに広域に食用菜が栽培されていたのである。菜園の位置は今の白雲観の西北一帯に属する。

その白雲観について拙稿（「北京・白雲観の伝承と道教古塔」）で触れたが、創建は唐代の739年と伝えられ、天長観と称した。のち戦火で焼失したが、丘処機が再興して長春宮と号した（1224年）。再び荒廃と戦火を被り、修築されて1445年に皇帝より白雲観の寺号を賜った。白雲観の言い伝えによると西側の仏寺と論争し、勝った白雲観がその仏寺を併合したという。その地が菜園になったのではとも思える。

その菜園の栽培地に黄色の食用菜が一面を覆っていたのであるが、では黄色のモクセイを彷彿とさせる植物とは何であろうか。その候補には幾つかの植物が挙げられる。そのモクセイと

黄色に関わる菜名には次の種類が挙げられる。

- (1) ユウスゲ説。ユリ科。中国名で「黄花菜」(金針菜とも。金花と通称)。

その黄色い花がキンモクセイに似る景観からモクセイ(木樨)と名付けられた。学名は *Citrina Baroni* var. *vespertina* (H. Hara) M. Hotta で、蕾が食用に供される。漢語では萱草・忘憂草とも記す。日本名はユウスゲ(夕萱。夕萱とも)で夕方に開花し、翌朝に閉じる。黄色の花でキスゲ(黄萱。黄萱の表記も。黄色いスゲの意)、忘れ草とも言う。エゾキスゲはこれに類し、昼間も開花し、北海道の小清水原生花園の群生は衆目を引く。薬用はホンカンゾウ(本萱草)に準じる。『北京地名典』の説)。

- (2) ウマゴヤシ説。マメ科。

中国語では「苜蓿」と書く。花は蝶形の黄色で密集すればキンモクセイの如き色彩を呈するであろうが、ここでは苜蓿が類音の木樨に変化したとの説である。ウマゴヤシ(馬肥)の学名は *Medicago Polymorpha* (多様の薬効の意)、英名は *California burclover*。馬の飼料とするもので、牧草となり、西欧ではクローバーと同一視される。紫色もあり、紫馬肥と言われ、アルファルファに相当する。花の蝶形は立体交差形の名称に使われ、復興門・建国門・阜成門・広渠門・六里橋に名付けられている。苜蓿の名については、注視すべき地下鉄路線駅名が1957年ソ連作成の計画図に木樨地ではなく「苜蓿地」の表記が見える。この名称は苜蓿に近いものと考えられる。但しこの計画図には後述するが真武廟を長武廟のように記す誤記もあり、確定的ではない。

- (3) 小ウマゴヤシ説。マメ科。

ウマゴヤシの小形のもので、学名は *Madicago minima*、中国語では黄花と記される。

- (4) シナガワハギ説。マメ科。

中国名は「草木樨」というマメ科の草名で、日本では品川に多生していたことから、シナガワハギと言われ、黄色い小さな花が咲く。白花種もある。牧草や蜜蜂用で薬効もある。学名は *Melilotus suaveolens* で、英名は *Yellow sweet clover* である。

これら4種のうち、ウマゴヤシは牧草で馬の飼育用とされることから、白雲觀の食材に適するものではないと思われる。コウマゴヤシも同上の理由。シナガワハギは草花が細く小さく、食用には効率が良くない。これらが除外され、ユウスゲが最もふさわしいものと考えられる。畑一面の濃い黄色はキンモクセイを連想させるのに十分であろうし、食用としても、白雲觀の僧侶の糧になったと思われる。

この地下鉄駅に関わる木樨地はほかにもあり、西城区に東木樨地・西木樨地、豊台区に木樨園があるが、共に皇室用の牧草として明・清代からウマゴヤシが植えられ、その黄色の草原をモクセイの花の色彩に比喩したものと解される。

なお1989年の天安門事件は6月4日であったが、後年になって、その日の前後に駅の半分の出入り口が閉鎖されることが2013年から2019年まで実施されている。その理由については明示されていない。

⑩南礼士路駅【南礼士路站】

木樨地駅が追加されることによって均準化された南礼士路駅であるが、この名称の由来には二つの説がある。その1は拙著『北京地名考』でふれたように、礼士はもと驢馬の糞を意味する驢屎から転じたもので、この道の通りにロバの糞が多かったことに由来する。1955年までは驢矢路（矢は屎を避けた同音字）であったが、類音の礼士路に改められた。

今一つの説は（同書 p.108）月壇公園の西にロバの市（驢市）が明清時代にあり、阜成門を境に南北に分かれて、驢市口と言われていた。民国時代になってロバの需要はなくなり、市場も消えて、驢市が礼士となり（一説に1911年）、北礼士路・南礼士路になったという。

これら2説はロバが多い通りという点では共通であるが、文字の変化については異なる故、地名の歴史的変遷を見てゆく必要がある。もとこの道は金の中都のうち北に位置する崇智門外の官道であったが元の大都によって廃された。明代になると南城（外城）が築かれ、その西便門外の官道となった。その通りの西側にある月壇の東門外には礼神坊（区域名）があったことから礼神街と称された。清代になると雍正2年（1724年）に礼神坊は光恒坊と改名されたことにより、礼神街は光恒街となった。また清代には阜成門外に驢市があり、ロバを貸借していたことから、驢市口といい、南北に分けていた。これが1911年ののち、驢市は礼士と雅名になり、南北の礼士路となった（『西城区地名志』）。

また北京市内には東城区に礼士胡同があるが、驢屎から礼士に変わったものとされている（『北京地名考』）。

なおこの南礼士路は1965年作成の路線図では、復興門駅の西側となっている。その路線図から見ても判るように駅の間隔がとても短い。1期工事路線から見ると当初は宣武門までで長く、すぐに長椿街駅が中間に追加されて、1 km前後の間隔となり、均等になるが、1965年プランでは他はほぼ全駅均等間隔の中で突出して短い。現在、南礼士路と復興門の駅間は424mで、中国地下鉄で最短の駅となっている。その至近間隔は1965年でも同様であったはずで、何らかの理由が1965年プランの地図に込められていると考えられる。復興門駅については、第2期工事まで着工されておらず、また環状ルートの一角として、城門跡に駅を設けることは当然の如く考えられるので適切と見られ、しかも交通の要路となっていた。南礼士路に特別な理由があるのではと思われ、その地域の特色を見ると、実は1957年のプランにもこの地に駅が設定され、長武廟とあるのは真武廟の誤りで、真武廟があった場所は南礼士路にほかならず、既に1957年の段階において復興門駅と真武廟駅が計画されていた。

真武廟は南礼士路の南端西南に位置し、真武廟路2条と復興門外大街の間（西便門外大街の西隣）にあった道教寺院で、清代の1980年（道光10年）6月に修築の記録があり、境内は2.8畝（約0.2ha）あり、様々な神像が祀られていた。旧日本軍の侵略により、真武廟は撤去され、僧侶も追放され、鉄製の鐘や香炉は略奪されて、軍用に使われた。

真武廟で祀られる真武帝君はもと玄武大帝といったが、宋の真宗のとき聖祖・趙玄朗（道教神）の玄の字を忌避して玄武を真武にしたもの。玄武は北方の神で火災を防ぐ。真武廟路一帯が境内であったが、今日では大きな道路が開けている。

その真武廟（南礼士路）一帯の特徴を見てみると、鉄道局をはじめ国家機関の建物が極めて多く、建築・軍事（炮総部）・放送関連の部署および宿舎が居並び、その地域的特性のためここに駅を設けることは前提条件とされていたと考えられる。また後年1970年には南礼士路には地下鉄関係の機関：〔地鉄運営処〕が設けられ、地下鉄建設の重要な地点でもあった。その場所は南礼士路真武廟2条で、翌1971年3月22日に東江民巷37号に移転している。

このように地下鉄工事関係者にとって重要な場所であった南礼士路は、その特殊事情により、駅設置の必須地点であって、今日最短となっているのも首肯できよう。（後編につづく）

主要参考資料（前編に関連する部分）

- 明・張爵『京師坊巷衢集』1560年
『宛署雜記』（明・沈榜1593年刊）
『日下旧聞考』清・乾隆期 1774年
『光緒順天府志』清・光緒年間
『清史稿』166卷
湯用彬『旧都文物略』文海出版社、1992年。原著1935年
高田真治『詩経』（漢詩大系）集英社、1979年
沈順根・張鳴「五棵松下話今昔」（『北京風物散記』第1集、叢宏業（等）科学普及出版社、1981年所収）
沈順根・張鳴「歴史滄桑の公主墳」（『北京風物散記』第1集、叢宏業（等）科学普及出版社、1981年所収）
林勤「我所知道的公主墳」（『文史資料選編』21輯、北京出版社、1984年所収）
侯仁之『北京歴史地図集』北京出版社、1985年
嚴肅『北京市街巷名称録』群衆出版社、1986年
増淵法之『日本中国植物名比較対照辞典』東方書店、1988年
松木民雄『北京地名考』朋友書店、1988年
『北京市地名志・石景山区卷』北京科学技術出版社、1991年
『中華人民共和國地名詞典・北京市』商務印書館、1991年
陳文良『北京伝統文化便覧』北京燕山出版社、1992年
『海淀区地名志』北京出版社、1992年
張清常『北京街巷名称史話』北京語言文化大学出版社、1997年
王同禎「公主墳瑣考」（『北京文物与考古』6輯 北京文物研究所編、民族出版社2004年）
加納喜光『動物の漢字語源辞典』東京堂出版、2007年
王彬・徐秀珊『北京地名典』中国文聯出版社、2008年
加納喜光『植物の漢字語源辞典』東京堂出版、2008年
北京市地鉄運営有限公司『北京地鉄發展史』北京出版社、2011年
ケルサン・タワー『チベット語辞典』カワチエン出版、2003年
宗緒盛『老北京地図の記憶』（中国地図出版社、2014年）
拙稿「北京・白雲觀の伝承と道教古塔」（東海大学国際文化学部紀要7号2014年）
北京地鉄1号路線：熱門資訊
百度百科
維基百科
<http://www.sohu.com>（図7中央・左）
<http://www.weibo.com>（図8）